

番外編 「ニュージーランドの近況」

本書はいつものコラムと違います。

日本ラグビーフットボール協会発行の「RUGBY FOOTBALL」Vol.13-1 1963号に掲載された記事です。

1964年行われた東京オリンピック前にニュージーランドに行かれ書かれた物です。

現代の様に簡単に海外へ行ける時代ではありませんでした。ラグビー界では八幡製鉄が海外遠征をしていたぐらいで、企業以外のチームが戦後海外へ行ったの大阪市立大学医学部が初めてだと思います。

現代でも十分通用する物と考え、転載しました。

読んでいただければ幸いです。

2007.08.12

管理人・すぎやま

ニュージーランドの近況

西 川 義 行

大阪市立大学医学部の医学研究班に同行してニュージーランドを訪れ当地のラグビーに接する機会を得ましたので展開したことを少し書いてみます。

御存じの様にニュージーランドはラグビーの国である。それは単なる国技という様な口先だけのものではなく生活の車に入り込んでいる。男の子は6~7才になるとラグビーを始め10才位になるともう普通のフォーメーションでどンドンゲームをやっている。ハーフタイムになるとじっとしておれなくなったお父さんやお母さんがグラウンドの息子の所へ行行って手真似足真似で励ます有様は見ていて大へん楽しかった。国民全体がラグビーに関心深いのでオールブラックスのメンバーともなると敬意を払われている。特にキャプテンウイソ氏は国民的英雄の感があり同氏に指導を受けたチームのことが翌日の新聞の一面に写真入りで大きく出ているのにはびっくりした。グラウンドの数も日本とはお話にならない。何しろ日本の四分の三位の広さの所に人口わずか二百五十万人程だからゆったりしたものである。気候も寒暑の差が少なく牧草が年中茂っている土地であるからグラウンドが芝生であるのも当然のことと云える。

街の真中に立派なグラウンドがたくさんあるのは羨ましい限りである。又、スタンドの下やクラブハウスには必ずといってよい位「オガ層」を敷きつめた室内練習場がある。その中にセットスクラム練習台がありオープン展開の練習以外はこの中である。シャワーや照明設備も整っていて夜間も困らない。照明設備という点では完備したグラウンドも多かった、というのも大学やクラブの練習は殆んど暗くなってからで、クライスチャーチの大学チーム（当地では一流）の練習は暗くなってから照明のもので1時間程FWとTBのコソビネーションプレーばかりであった。基礎が出来ているからであろうがいつもそうであるということであった。

ビッグゲームは二つしかみていないが、試合と練習を見た感じでは、身体の大きさとキックの大きさの差こそあれ個人的技術という点ではわが国の水準と差はない。理論的にはポジションに就いて強調するだけで、15人でボールをオープンへ展開させることに全力を注いでいる。ボールがオープンへまわった時の集中力は実に素晴らしい。対称的なディフェンスラインへは必ずといってよい位FBか反対側のCTBやWTBがカバーに廻っている。ブラインドサイドを突く様なことはみられない。

私は現地でのダニーデンに於ける交歓試合で計画的にラインアウトのボールをリターンさせてタッチ際を抜いてみたがアドヴァンテージライスは難なく突破できた。WTBがスローインする関係もあろうがブラインドサイドの事は考えていない様である。

ルールの適用に関してはオールジャパンのカナダ遠征の時の話によりわが国との相違点を研究課題として行ったが、結論的にはカナダと共通した点が多かった様に思われた。根本的には、イコールコンディションである事を常に考えるということ、危険防止とオープン展開へのリードを誠に忠実に実践していると言える。ノックオンに対するアドヴァンテージルール適用は実に積極的でそれによるスクラムが少ない。

ルールブック通りにボールを真下に落してもノックオンではなく、たとえ手に当たってから真

下に落ちてもし変わらない、而も落ちたボールがそれから前にもろんでも関係がないということであらためて認識させられた。

次に一方がノックオンした場合相手側がそのボールをプレーするとたとえそれが地域的戦略的利益でなくても試合は続行される。ノックオンした側が直ちにそのボールをプレーしない限り笛は吹かれない。笛を吹いてゲームを止めてセットスクラムにしたのと、吹かないでおいたのとはイコールコンディションという点でも差はないからゲームをオープンへ展開させる為に笛を吹かないのであろう。

スローフォワードに就いては、真横へのパスがスローフォワードでないことは勿論だが、オンサイドにいる味方にパスした場合、受けた瞬間にパスした位置より前気味であってもスローフォワードの反則をとらない。後にいた味方にパスしたという意見であった。レフェリーのこういう判断によりナイスホローが導かれ、生かされることを痛感した。勿論ディフェンス側もそれを承知の上だからボールを受けた者を倒そうと努力する。これらの判断によってゲームが切れずに連続したオープンプレーの面白さを満喫する事が出来た。とぎれないでボールがグラソド一杯に大きく動きまわるのは実に楽しいことであった。10才の少年たちのラグビーを初めて見た時ノックオンとスローフォワードの反則が何時起きるかと思える位ゲームが続行された。日本の中学生たちにもぶつかり合いばかりさせないでもっとボールをまわし合う楽しさを味わわせたいものである。その時こそ「オールウエイズオンザボール」ということばの意味を彼等に説明出来るのではないかと思う。

ミスによるセットスクラムは少いかわりに地上に折り重なって倒れた場合、危険を防止する為のスクラムは逆に日本より多い。ライイングオンザボールの反則を早くとり、どちら側にもボールが出そうでない時は直ぐ笛を吹いてスクラムにしてしまうからだんご状態は起らない。みこし状も殆んどなかったが、これはプレーヤー各自がパスすることを心掛けない限りなくなるだろう。

身体を掴まれて（タックルかどうかに問題があるが）上向きや横向きに倒れると同時にパスをしても反則をとらない。パスが出来る限り身体が地面についてもパスをしてもよいという見解をとっている。但しこれは瞬間的なことであって倒れてから間をおいてホローが来た時にパスをするのではない。レフェリーのこの判断によってボールが停滞しない場合が幾つかあった。ダンボールするよりこの方がスムーズにボールが展開する。

ルーススクラムに就ては地上に立っている敵味方の2人が身体がふれ合っているだけではルースとみなしていない。3人が組み合うということを強調していた。この点について質問しただけでゲーム中にその限界をはっきり見ることが出来なかった。

FBの頭を越す様な大きなキックの場合、相手側はオフサイドの者もボールの所まで走って行ってタックル出来るというケースは一度だけ見ることが出来たがこれはキックの大きさによると思う。

その他小さいことを2,3挙げてみると、私達の教えられている事に反して選手達のグラウンド到着が遅い、30分位前にきてバタバタと着かえて外では殆んど練習しない。又国内試合ではメンバーチェンジが出来るのには面くらった。雨が降ったからだろうがハーフタイムにスタンド内に入って休むのは勝手が違った。全般にあまり固く考えていないようでスポーツをあくまで楽しもうとする風潮がひしひしと感じられた。

その他ボールがラインからずっと遠くへ出るとボールボーイがいてすぐに代りのボールを渡していたが、ロスタイムがないのでよいと思った。子供は7-8才からラグビーを始めるのだが少年チームに相当年輩のコーチがついていて指導に当たっている。コーチはきびしい。少年たちは学校でやるだけでなくクラブチームに属している。クラブ組織は例えば地名をとった「大阪」というクラブに10才ぐらいからエイジグループ（年令別）のチームが20以上もあり、他のクラブの同年令のチームと試合をする。そのクラブのベストメンバー同志の対戦ともなれば一生懸命応援をする。地域対抗の範囲が広まって北島と南島の対戦となり最後にオールブラックスが選ばれ外国と試合をするのである。われわれの滞在した7月下旬-8月上旬にはオールブラックスの試合はなかった。少年たちはラインアウトの時両手を頭の後にあて、バーjingの予備行動を防いでいたし、ボールを早く離すことを強調されているのも印象的だった。

以上いろいろと書いて来たが美しい自然と親切でゆったりしたニュージーランドの人々の間での15日間は素晴らしいものであった。そして、グラウンドがふえることや、それが芝生になることは日本で望むのは無理であってもよりよいラグビーをするということはプレーヤーの心がけ次第で出来ることである。人間が作ったラグビーをもっともっとわれわれ現在の人間によって高めたいものである。

(大阪府ラグビー協会幹事)